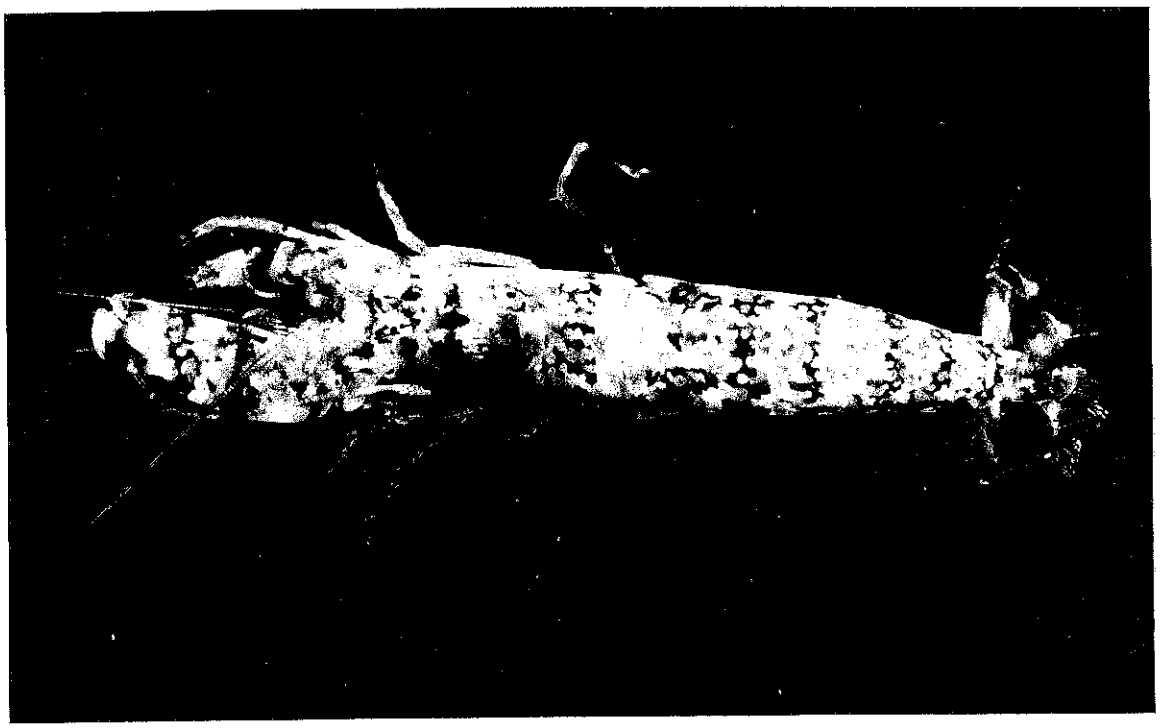
ISSN 1341-6928

串本海中公園
マリンパビリオン

1998. 6. Vol. 27, No. 6



ミゾナシアシボソテッポウエビ（仮称）
Alpheus sp.

テッポウエビ属カスリテッポウエビ群に属する。体長20mmほどの小型種。体の地は乳白色で、体の背面には深緑色の虫食い状の横帯模様がある。大鉗掌部は丸みを帯び、同部の上縁に1本の横溝がある。本種の体色や形態はサンゴ礁域に生息するアシボソテッポウエビ *A. gracilipes* に酷似するが、後者の額角の甲延長部は平坦な三角形状を呈し、その両側に生じた深い溝によって明瞭に区画されるのに対し、本種はそのような特殊な形態を持たないことで区別される。

本種もアシボソテッポウエビ同様に沖縄のサンゴ礁域でもっぱら採集される。写真の個体は串本町潮岬アンドノ鼻、水深20mの転石下より得られた体長約15mmの雌。テッポウエビ科。

K. N.

串本海中公園センター

タスマニアの物語
（後編）

森 美枝

シャークスキンのスーツを着てフーカー潜水をする、この時代を感じさせるスタイルと暗い海の色にとまどいながら、未体験の海に飛び込んだ。！思わず息をのみこんだ。予想外に冷たい海水が大きめのスーツの隙間にどっと流れ込んだのだ。おまけに合わせたはずのマスクからは大量の水が入り、思い切り鼻から水を吸ってしまった。陸上では刺すような太陽が照りつけ、一見南国の海を思わせる雰囲気に、心も体も油断していたのだ。汗だくになっていた体にはみるみる鳥肌がたち、シャークスキンの下はチキンスキン！、と笑える余裕はなかった。

水温15℃。当センター前の海でいえば真冬の最低水温に近い。ドライスーツで作業しても長時間は潜っていたくない水温。だが、タスマニアではそれが当たり前のことなのだろう。一緒に潜って、水中を案内して下さった地元ウィンヤードロータリークラブの会長さんもやはりウェットスーツで潜っていたが、「今日の海はとても快適だ！」と喜んでいた。

水とフーカーに慣れるため、しばらく水面を泳いでいたが、マスクの水漏れはとまらない。水深10m位といわれた海底の様子も、青黒い水の色だけが見えるだけで何も分からない。冷たい水、合わないマスク、心理的なプレッシャーが重なって不安はつのるばかりだった。視線を水面付近にやると白い懸濁物の粒子たくさん流れていた。目を凝らすとそれらはボウズウミノミ類という甲殻類の仲間であることが分かった。

会長さんの合図と共に、いよいよ暗い海底に向かう。間もなく海底が見えてきた、と同時に海底が大きく動いたような感覚にとらわれた。海底には長さ1m程の褐色の海藻が一面に生えていて、それらが波とともに一斉に揺れ動いているためであった。これまで、海と言えばサンゴの生息する暖かい海しか知らなかった私にとって、まさにここは見たこともない世界であった。海藻のほとんどはヒバマタ目の仲間である。タスマニアの海ではアバローニと呼ばれるアワビが有名で、日本へも多量に輸出されている。このうっそうと茂る海中林がアワビを始めとするタスマニアの豊富な魚介類を育んでいるのだと実感した。

褐色の林を見下ろしながら泳いでいると、水中崖の割れ目に何か黄色い花が咲いているように見えるものがあった。それは黄色いスナギンチャクの仲間であった。串本で見かけるスナギンチャクとは全然違う形をしており、一見キサンゴの仲間を思わせるその形はスナギンチャクの仲間とはとても思えなかった。タスマニアの海の中はどちらかといえば色彩に乏しい。魚達も、私の見た限りでは黒っぽい地味な色をしたものが多い。そんな世界で、その黄色いスナギンチャクはいっそう華やかに映った。

会長がしきりに岩穴を探しては中を覗いている。彼は岩穴に潜むクライフィッシュと呼ばれるイセエビの仲間を探しているようだった。手には先にカギ状の爪のついた長い棒を持っていて、エビを見つけたらそれでひっかけて引きずりだすようである。タスマニアでは、このクライフィッシュもまた重要な水産資源で、資料によると南オーストラリアとタスマニアでその水揚げ量は年間5千トンに及ぶという。日本へも盛んに輸出されており、当センターでは8年前和歌山県太地町のイセエビ刺網に混入したものが持ち込まれ、本誌で「南半球からの迷客」として紹介された（Vol. 19, p. 22）。水産価値の高いこのエビ、日本ならその捕獲はきびしく取り締まられるところだろう。しかし、タスマニアでは年間いくらかのお金を払えば、一般の人でも捕獲が許されるという。その金額は忘れてしまったが、そう驚くような値段でもなかったと思う。会長いわく、ここは彼のクライフィッシュ・ポイントなのだそうだ。

小一時間ほど潜って船に上がった。初めて見る世界に興味津々で、いつの間にか時間が経ってしまったという感じだが、寒さは結構体にこたえた。船の上は、南国の太陽が照りつけてい

たが、芯まで冷えた体はすぐには元には戻らない。震える手でお昼のサンドイッチをようやく口に押し込みながら、午後からのダイビングを考えると再び冷たい海の中に戻ることがとてつもなく苦痛に思えてきた。

2回目のポイントはボートハーバービーチの西側にある小島の周辺。水深は1回目と同じ10m位。意を決して飛び込んだが、今回のポイントは1回目のポイントよりも水はやや暖かく、少しホッとした。海中の様子はさっきのポイントに比べると海藻が少なく、海底はフラットで転石が目立った。水温が暖かいせいか先ほどのポイントより魚影が濃いように思われた。特に目に付いたのはカワビシャ科の仲間で*Pentaceropsis recurvirostris*と思われる魚。私たちを見ても我関せずというような感じで泳いでいた。また色黒のハリセンボンのような*Diodon nicthemerus*。このハリセンボンもまた特にあわてる様子もなく波に漂うように泳いでいた。海底にはまるでテーブルサンゴを思わせる直径30cmほどの円卓状のカイメンが点在していた。これらユニークな海の生き物たちを目の前にして、水中カメラを持って来なかったことを本当に後悔した。タスマニアの海は熱帯の海のような華やかさはないが、目にとまる生物の一つ一つが個性的で興味深かった。

タスマニアが水産業の盛んな島であることはこれまで何度も述べてきたが、特に養殖業は主要な産業の一つである。主なものはカキやサケ・マスなどで、これらの養殖場はタスマニア各地に点在している。私が見学したサケ・マス養殖場では、主にアトランティックサーモン、ニジマスなどを養殖していたが、そこでは親魚やある程度大きくなった魚を蓄養するために、地面に巨大な用水路のような溝を掘り、そこに水を貯めて魚を飼っていた。水は近くの小川からポンプで引いているという。まるで野池のような池がいくつも並んでいる光景は、いかにも粗放的といった感じだが、魚はほとんど病気にならないというから、魚にとってその環境は案外快適なのかもしれない。羊や牛などの牧畜もまた粗放的だが、これがタスマニアンスタイルというものか、と思った。



図. 露天掘りのサケ・マスの養殖場

タスマニアでは自然は人々の暮らしのすぐ隣にある。自然が身近にありすぎるといつのまにかそれが当たり前のようになってしまうが、タスマニアの人たちは積極的に自然とのつながりを求めているように思われた。平均4週間という日本では考えられない長期休暇には海辺のあるいは川辺などのセカンドハウスでのんびり時を過ごすという人は多い。森林公園などいくつかの自然公園で、定年後ボランティアでそこの自然について説明する仕事をしている人達に出会った。私のホストファミリーのお父さんの一人も、定年後子供達にキャンプなど野外活動の指導を行っている。彼は癌で毎朝山のような薬を飲んでいた。しかし彼はどんな健康な人よりも生き生きとして見えた。生涯自然に関わって生きていこうとする人々に出会い、知識以上に大切なことを学んだように思う。

海中観察会のお知らせ

7月20日（月）「海の記念日」9時～4時

恒例になりました、環境庁及び和歌山県主催の海中観察会が当センターで行われます。
参加料は100円（保険料のみ）です。
すばらしい海の世界が一歩あなたに近づきます！

受付、詳しいお問い合わせなどは環境庁近畿地区国立公園・野生生物事務所（Tel.0735-22-0342）まで。なお、定員に限りがありますのでお申し込みはお早めにお願いいたします。

ANTHOZOOLOGIA （70） 八放サンゴ類　その1

岩瀬 文人

前回までで花虫類の分類体系の変遷を概観し、最後にこれらの集大成として内田による現生の刺胞動物類、特に花虫類の分類体系を示した（Vol. 26, pp. 57, 68-69）。今回からはこの体系にそって各グループの詳細について解説するが、前回末尾に書いてある通り、八放サンゴ類については岩瀬が担当する。

繰り返しになるが、内田による現生花虫類の分類体系の内、八放サンゴ類の部分を以下に再掲する。

Class Octactiniaria Beneden, 1898　八放サンゴ綱

Order 1. Alcyonaria Lamouroux, 1816
ウミトサカ目
Suborder 1. Protoalcyonaria Hickson, 1883
原始八放サンゴ亜目（2科）
Suborder 2. Stolonifera Hickson, 1883
根生亜目（4科）
Suborder 3. Alcyonacea Lamouroux, 1816
ウミトサカ亜目（6科）
Suborder 4. Gastraxonacea
Utinomi & Harada, 1973
腸軸亜目（1科）
Suborder 5. Scleraxonia Studer, 1887
石軸亜目（7科）
Suborder 6. Holaxonia Studer, 1887
角軸亜目（9科）
Order 2. Helioporacea Bayer & Muzik, 1977
アオサンゴ目（2科）
Order 3. Pennatulacea Verrill, 1865
ウミエラ目
Suborder 1. Sessiliflorae Kukenthal, 1915
定座亜目（11科）
Suborder 2. Subselliflorae Kukenthal, 1915
半座亜目（3科）

これからこの分類体系に従って、属のレベルまで解説を行っていく。

Class Octactiniaria Beneden, 1898　八放サンゴ綱

常に8枚の完全隔膜を持つ花虫類。触手は各隔膜の間から1本ずつ出て、ほとんど全ての種の触手は羽状突起を備える。多くの種では口道に1本の管溝があるが、ないものもある。ポリプ上半は花頭部、下半は花柄部と呼ばれ、多くの種では花頭部は花柄部の中に退縮する。群体性の種が多いが、単体性の種もわずかに知られている。群体性の種では、各ポリプの間は溝道と呼ばれる管によって連絡していて、栄養を共有している。群体性の種では多くの種でポリプ基部、共肉との境に莢があり、ポリプ全体が莢中に退縮する種が少なくない。ほとんどの種では骨片と呼ばれる長さ数ミクロンから数ミリの石灰質の小粒が体組織中に分布しており、時には先端が外部に突出することもある。骨片は中膠性の造骨細胞によって造られる。骨片の形状、サイズ、分布状況などは分類の標徴として重要だが、中には骨片を全く欠く種もある。刺胞はb型基棘刺胞のみが存在するといわれているが、検討を要する。全て海産。

群体の形などにより、ウミトサカ目Alcyonaria、アオサンゴ目Helioporacea、ウミエラ目Pennatulaceaの3目に分けられる。

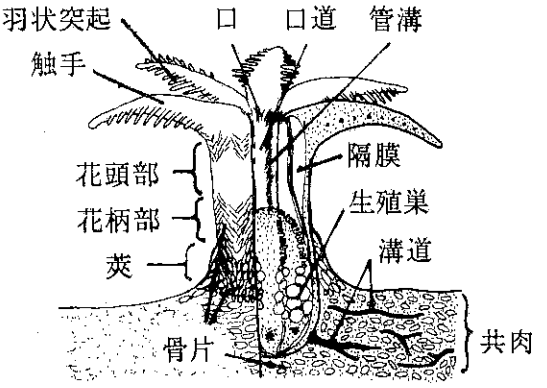


図1. 八放サンゴ綱のポリプ模式図

Order 1. Alcyonaria Lamouroux, 1816
ウミトサカ目

本目は従来
Protoalcyonaria 原始八放サンゴ目
Stolonifera 根生目
Telestacea コエダ目
Alcyonacea ウミトサカ目
Gastraxonacea 腸軸目
Gorgonacea ヤギ目
の6目に分けられていたが、Bayer（1981a）によってまずコエダ目が根生目の中に取り込まれ、さらにBayer（1981b）によって腸軸目も根生目の中に取り込んだ上で、残った4目も各目の間に明瞭な境界を引くことが出来ないとしてひとつにまとめられたものである（Vol. 25, p. 59）。

ごく一部の種を除いて固着性で、群体形はリボン状、膜状、指状、塊状、鞭状、樹状など様々。固着性でないものでは砂中に埋まった群体基部がヘラ状や板根状に広がっていて、その表面には多数の砂粒を付けており、群体の固着部が二次的に変形したものである。原始八放サンゴ亜目のみは単体性であるが他は全て群体性で、ウミトサカ亜目の一部と腸軸亜目、石軸亜目の一部にはポリプの多形現象が見られる。原始八放サンゴ亜目と根生亜目の一部の種を除いて体組織中に骨片がある。根生亜目、ウミトサカ亜目、腸軸亜目の3亜目は胃腔や胃水管系に吸い込んだ海水の膨圧と、群体の共肉中に充満した、あるいは群体壁面に敷石状に配置した骨片によって群体形を保っている。膨圧によって群体形を保っているものは海水の取り込みや排出によって群体の大きさが著しく変化する。石軸亜目と角軸亜目（従来ヤギ目と呼ばれていたグループ）は群体中軸に骨軸があり、群体を支持している。骨軸は石軸亜目では骨片により構成されており、角軸亜目ではゴルゴニンという角質で出来ている。

Suborder 1. Protoalcyonaria Hickson, 1883
原始八放サンゴ亜目

八放サンゴ類で唯一単体性のグループで、2科5属が知られている。いずれも深海産で、日本近海からは知られていない。

本亜目は個体のサイズが小さい上に深海産であるため、これまでに採集されている標本数が極めて少なく、標本数の増加とさらなる検討が待たれる。

Family 1. Haimeidae Wright, 1865

ポリプは堅い基質に直接定着する。ポリプからは走根や糸状の支持根などは出ない。4属4種が知られている。

Genus 1. *Haimea* Milne-Edwards & Haime, 1857
ポリプは円筒形で小さく、花頭部は花柄部の中に退縮する。骨片は非常に棘の多い紡錘形及び棍棒形と十字形。*Haimea funebris* 1種のみ。

Genus 2. *Hartea* Wright, 1865
ポリプは長く、花頭部は花柄部の中に退縮する。骨片は棘のある紡錘形。*Hartea elegans* 1種のみ。

Genus 3. *Monoxenia* Haeckel, 1876
骨片はない。*Monoxenia darwini* 1種のみ。

Genus 4. *Psuchastes Wright*, 1859
Psuchastes glacialis 1種のみ。

Bayer（1976）によると、*Psuchastes glacialis* は群体性の種の幼形である可能性が高く、もしそうであれば根生亜目に属するべきである。その場合、科Haimeidaeは3属3種からなることになる。

Family 2. Taiaroidae Bayer & Muzik, 1976

ポリプ基底部には糸状の支持根が多数出ており、これにより柔らかい基質上に立っている。ポリプは円筒形で、花柄部は角質で覆われており、多数の細長い紡錘形骨片によって覆われている花頭部は花柄部の中に退縮する。1属1種。

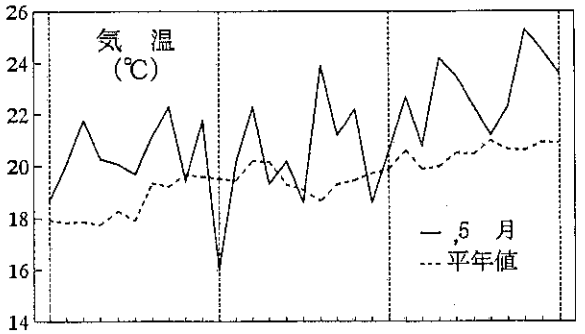
Genus 1. *Taiaroa* Bayer & Muzik, 1976
科の記載の通り。*Taiaroa tauhou* 1種のみ。

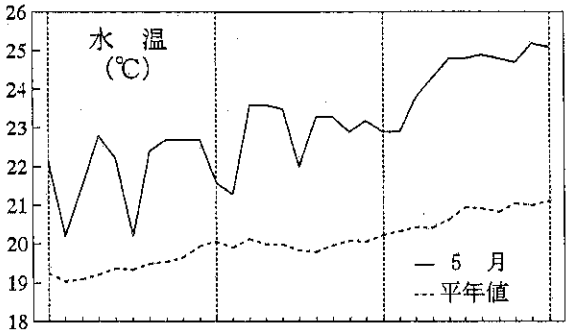
錆浦の海から

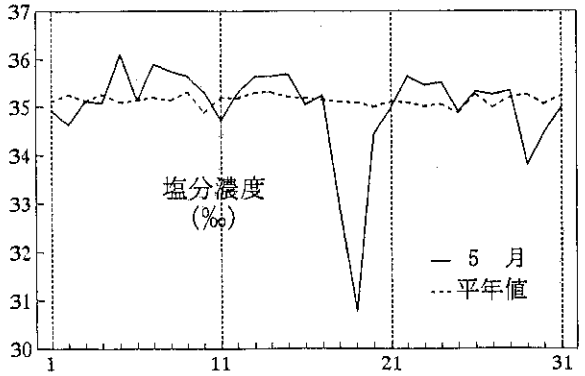
宇井晋介

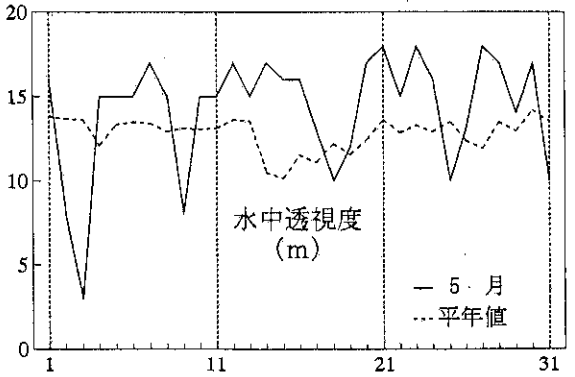
5月平均値	気温　21.3 ℃	水温　23.1 ℃	塩分　35.0 ‰
	透視度14.2 m	月間降水量　339.5 mm	

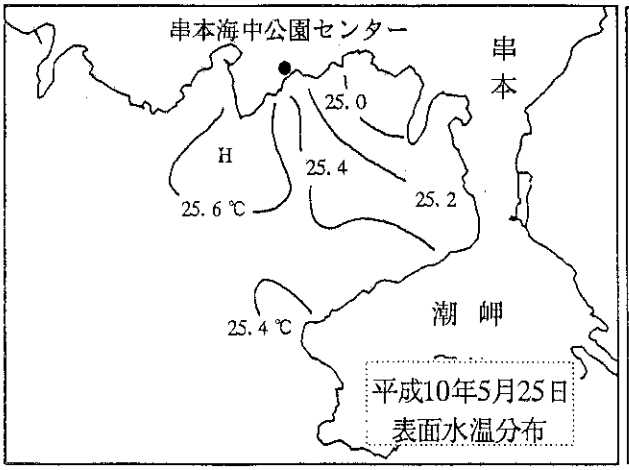
ここ7年ほど続いていた黒潮の接岸傾向がどうやら終了しそうな雲行きである。5月30日、前日までごうごうと西から東へ流れていた潮岬先端の急潮は、当日朝には完全に止まっており、翌日には一転逆方向に流れていた。それに伴って海の色は濃い藍色から深緑色へと変化した。熊野灘側からの黒潮の反転流が沿岸の水を沖に押し出したためである。現在黒潮の流れの軸は沖合６０マイル、このまま大蛇行という形になるのかどうか、もしそうなら今年からの冬場の水温の低下は避けられない。ここ数年小誌上を楽しませてくれた様々な熱帯性生物の出現もしばらくはなくなるだろう。もし長引けば冬場の低水温による造礁サンゴ類の白化・死滅という事態も予測される。アジサイの花を見ながら冬の心配をするのもずいぶんと気の早い話だが、過去の例を見ると心穏やかではいられない。しかし残念ながら流れの行方はちょうど立ち上る煙のごとく神のみぞ知るところである。











マリンパビリオン Vol. 27, No. 6 通巻 318号
1部 50円（年間購読料 1,500円）
印刷日　平成 10 年 6 月 20 日
発行日　平成 10 年 6 月 25 日
口座番号：00990-9-41351
口座名称：串本海中公園マリンパビリオン
編集兼発行人
〒649-3514 和歌山県西牟婁郡串本町有田1157
（株）串本海中公園センター
電話　0735（62）4875
FAX　0735（62）7170
印刷所
坂本印刷
串本町串本2481　Tel: 0735（62）0895